

想

「末の松山」と3.11

町長 三浦正隆

契りきな

かたみに袖を 絞りつつ

末の松山 浪こさどとは

この歌は小倉百人一首の中の一つで、恋人の心変わりを男性の側から咎める歌です。私は女ばかりの兄弟の中で育ちましたので、正月には家族でよく百人一首をやりました。子供の頃に覚えたことはこの年になっても忘れません。有り難いことです。

作者は清少納言の父、清原元輔で後拾遺和歌集（1086年）に



末の松山(多賀城市八幡)

撰ばれておりますが、「末の松山」というこの有名な歌枕が仙台のお隣の多賀城市に在るということをつい最近知りました。

昨年12月、仙台で中央官庁の出身機関への要望活動を終えた後、どうしても見たたくて、私だけ帰りの電車を2時間遅らせて多賀城市へ向かいました。

仙台から多賀城駅までは電車で約20分。駅から歩くこと約10分で末の松山のある末松山寶国寺に着きます。お寺の裏手に墓所があり、そのすぐ後ろにある小高い丘の上に樹齢450年くらいでしょいか2本の松が立っています。

君をおきて

あだし心を わがもたば

すゑの松山 浪もこえなむ

(東歌)

末の松山が京都の歌壇に登場するのは古今和歌集（905年）に東歌として撰ばれてからと言われています。多賀城は当時、東北地

方における政治と軍事の中心地でした。都人にとって東北地方は金や馬の産地として憧憬の地でありました。そして、「末の松山」は「浪が絶対に越えることはないもの」として、「あり得ないこと、永久に不滅なこと」の象徴として使われています。つまり「浪」とは普通の波では無く当時1千人が死亡したと言われる貞観地震（869年）の際の「大津波」のことではないか、それが年月の経過と共に記憶が風化し恋愛の歌枕となったのではないかとされています。

寶国寺のご住職にお会いして東日本大震災の頃のお話しを伺いました。ここは海岸から約2キロ位離れていますが、当時やはり津波がすぐそこまで来たそうです。そ



「末の松山」碑文



末松山寶国寺

う言えばこの界限の扉には所どころに津波の水位を書いたプレートが取り付けられておりました。地元の人達は昔からこの「末の松山」は安全な場所だと知っていたそうで、100人くらいの人達が避難したそうです。「実は大津波は今回で3度目なんです。」今回の3.11と貞観地震以外にも慶長大地震（1612年）の際もあったそうです。東日本大震災が発災してもうすぐ6年目を迎えます。昨年は熊本、大分、鳥取で大きな地震がありました。寺田寅彦は「天災は忘れた頃にやって来る」と言ったそうでもあります。最近では忘れない内にやって来ます。日本は世界に冠たる地震大国です。いつ来ても迅速に行動できるように日頃からの備えをお願いいたします。

皆様、今月もどうかお元気で健康でお過ごし下さい。